

「念仏には無義をもって義とす。不可称不可説不可思議のゆえに」とおおせそ  
うらいき

第4組 瑞雲寺住職

小泉 元瑞

text by Genzui Koizumi

## 第10章「念仏には無義をもって義とす」

— 歎異の伝統 —

『歎異抄』の中でもっとも短いこの第十条は、第三条と同様に、「おおせそ  
うらいき」という言い切る形で結ばれています。そして始めの第三条までで真  
宗の教行証が大体収まり、また第十条は上の九ヶ条を締めくくり、全体を一貫  
する言葉であると指摘されています。そこで従来、二つの言葉が法然上人と宗  
祖、どちらの言葉であるのかという議論があります。これについては「他力に  
は義のなきをもって義とすと、本師聖人のおおせごとなり」（『銘文』聖典五  
三二頁）、また「如来の誓願には義なきを義とすとは、大師聖人の仰せに候い  
き」（『御消息集』聖典五八九頁）などとあります。これは、よき人法然上人  
の仰せを聞かれた宗祖の言葉を、選択本願の「念仏には」との一語に摂めて、  
唯円がその意を受けとめられたのでしょう。どちらにしても、その言葉を「仰  
せ」としてわが身に蒙った、ということが大事な点です。これについては、「作  
者自身が親鸞の言葉によって歎異されたという実感がある…作者が他の人を歎  
異するに先立って、歎異されたという身に覚えがあった」（『歎異抄の心を語  
る』廣瀬杲著）、したがって先の十ヶ条も「歎異」であると注意され、さらに  
その歎異せしめる原形は、七高僧を辿って『大経』にあると語られます。そ  
から教えられることは、お聖教は研究の対象ではなく、私自身に歎異の精神を  
呼び覚ますべく用らき、しかもその伝統がすでに原初からあるということなの  
です。

—自力で念仏を解釈する—

では、なぜ師訓篇の最後に殊さらに「念仏には無義をもって義とす」と語られなければならないのでしょうか。ここにいわれる「義と申すことは、行者のおのおのはからう事」（前掲『御消息集』）を意味します。本来無義であるところの弥陀の本願念仏の教えを、「ただ念仏のみ」と聞きながら、自力の心を宗として学んでいるために、それだけでは何か物足りなく思えてしまう、そのために義を付けざるを得なくなるのでしょうか。それについては、「おのおの本業を執してすてがたくおもう」（『唯信紗』聖典九二〇頁）、また「うつくしくその理耳にとどまらざるによりて、わが本宗のこころをいまだすてやらずして、かえりてそれを浄土宗にひきいれんと（『御文』二帖一五通）して、各々義を立てているという指摘の通りであります。

しかし、その聖道門的体質について、楠信生氏は、宗祖と越後の人々との出会いにおいて「自分が異質なものを待っていたのです。それが第十九願の根性を持っているという発見なのです。本願に帰してなお自力の執心から離れられない私」（『法語から読む宗祖親鸞聖人4』二七頁）の本質と抑えられ、さらに「回心や信心は念仏の教え、本願の教えに出遇うことによってもたらされるのですが、それをすぐ知らず知らずのうちに自分の手柄にする。そして、まだこんなこともわからないのか、と人を見下す。教えてもらわなければわからなかったということをもすぐ忘れてしまうのです。自分自身が本願の教えに出遇い、念仏の教えに出遇ったということさえも、得意になるような根性が人間にある」（同三〇頁）ことが問題であると語られます。つまり意義の論証や排異と、歎異は違うのです。僧分たる自分の信心が今において尚、歎くべき異なりであることを見失わないということなのです。最後に改めて、そうした私たち人間の思いや自分流の解釈を破る念仏の意義を、「不可称不可説不可思議」と示しておられます。